様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月 10 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５３０５０７
研究課題名（和文）　日本ハンセン病社会事業における隔離監禁主義と治療解放主義の相克過程に関する研究
研究課題名（英文）　A Study on History of Social Work for Hansen's Disease Patients in Japan during 1920s:Focused on Conflict between Compulsory Isolation and Parole

研究代表者
平田　勝政（HIRATA　KATSUMASA）
長崎大学・教育学部・教授
研究者番号：１０２１８７７９

研究成果の概要（和文）：日本では、1907 年の法律第 11 号「癩予防ニ関スル件」に始まり、1996 年の「らい予防法」廃止に至るまでの 90 年の長きにわたりハンセン病患者の隔離政策が存続した。日本のハンセン病政策は、世界の動向からどこで乖離して道を間違えたのか、その理由と原因はいまだ十分解明されていない。本研究は、1920 年代のハンセン病社会事業における強制隔離主義と治療解放主義の相克過程の研究を通して、その乖離の理由と原因を解明していこうとするものである。

研究成果の概要（英文）：In Japan, the policy for Hansen's disease patients began from when the government enacted "law No.11 (The leprosy prevention act)" in 1907 .Then , the enactment of "Leprosy Prevention Law" in 1931 changed to absolute isolation of all leprosy patients. This law underwent amendments and existed up to 1996. The reason why wrong policies was continued for a long period of about 90 years is not clarified enough. The purpose of this study is a investigation of the truth about alienation from international tendency through the historical study of social work for Hansen's disease patients in 1920s,focusing on conflict between compulsory isolation and parole.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	2,100,000	630,000	2,730,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ハンセン病、社会事業、社会的排除、強制隔離、パロール（解放）

１．研究開始当初の背景

本研究は、なぜ日本ではハンセン病患者が国際動向から乖離して９０年もの長きにわたり隔離を強制され続け、取り返しのつかない過ち（人権侵害・人生被害）を生じさせてしまったのか、日本はどこで道を間違えたのか、その真相究明作業は未だ十分とはいえないという問題意識から出発している。

研究の着想の契機は、2005 年に『近現代日本ハンセン病問題資料集成』（不二出版）の補巻７（台湾におけるハンセン病政策）の編集・解説の作業（５の図書②参照）の中で、新資料として発掘した「楽生院」の開院式（1930 年 12 月）における上川豊院長の「式辞」中に、「多年」の「志」として「所謂患者絶対強制隔離主義を排し、人類愛の見地」に立った「人道的隔離法」をもって処遇することを「経営の方針」とするという言明を発見したことにある。また同時期に、青木大勇（長崎皮膚科病院長）が、ハンセン病患者を「強制的に隔離し、而も之を監禁本位に取締まる」ことは、「全く時代遅れの隔離法と云はなくてはならぬ」という注目すべき主張を展開した。その青木は、すでに「癩療養所を隔離・監禁本位より治療・研究本位へ」と題する論文を 1926 年に発表していた。これらの事実は、①「絶対強制隔離主義」とは異なる方向をめざす自覚的流れが 1920 年代に形成・存在したこと、②その結果としてハンセン病社会事業（当時は「救癩事業」と呼称）の在り方にも大きな相違が生じる可能性が存在したこと、を示唆していた。

２．研究の目的

そこで本研究は、日本のハンセン病政策とその社会事業の在り方に決定的な相違をもたらす隔離（監禁）主義と治療（解放）主義に注目して、この二つの考え方の成立・展開と相克の過程を解明し、日本はどこで道を間違えたのか、その真相の究明を目的とした。

３．研究の方法

上記の研究目的実現のために、下記の（A）（B）（C）の３本柱で課題を設定し研究作業に取り組んだ。

（A）第一は、治療解放主義の国際的動向とその日本への影響、さらにその影響の具体的展開過程に関する研究である。

（B）第二は、隔離監禁主義の政策・運動の成立・展開過程に関する研究である。

（C）第三は、治療解放主義と隔離監禁主義の相克に関する研究である。

本研究が主に分析の対象としたのは、①1920 年代の社会事業関係雑誌や医学関係雑誌におけるハンセン病関係資料、②1920 年代の新聞（全国紙、愛知県・香川県・福岡県・熊本県等の地方紙、台湾日日新報等）におけるハンセン病関係記事であり、それらを手がかりに関連資料を調査・発掘して研究を推進した。また、日本ハンセン病問題史研究の基本史料である「日本ＭＴＬ」関係資料の復刻を出版社と協力しておこない研究条件を便利にした。

４．研究成果

（A）治療解放主義の動向に関する研究成果

この分野では、1920 年代の治療解放主義の国際的普及に大きな影響を及ぼしたハワイ大学総長で化学者のディーン博士の大楓子油エチィールエステル製剤による治療法とハワイでの政策転換（隔離から解放＝パロールへ）の日本への影響に注目して研究した。具体的には、1922 年のディーン博士来日の事実とその講演活動・講演記録を発掘して検討し、日本社会福祉学会第５６回大会（2008 年）で口頭発表し、それを「日本ハンセン病社会事業史研究（第１報）―1922 年のディーン博士の来日とその治療解放主義の影響の検討―」と題する論文にまとめ、「長崎大学教育学部紀要」第 73 号（2009 年）に発表した。研究の結果、ディーン博士は、慶応大学、東京大学、京都大学等での講演を通して、①科学と医学の進歩（化学療法）により「癩病」が不治の病から治癒可能な病気となってきたこと、②その可能性をさらに開拓していくためには大学（研究機関）と療養所（治療機関）とが連携・協同して英知を結集し科学的治療法の研究を発展させること、③人権尊重と人道的見地から強制隔離政策は見直されるべきで、慎重な手続きを経て、他者への感染の可能性がない限り解放して「一般の人」として通常の生活が営めるように政策を転換すべきこと、④さらに全生病院の視察をふまえて、日本の患者には、「羞恥と絶望の色が漲って居る」ことを察知して、その「羞恥と絶望」の背後にあるものを除去していく努力が必要であること、などの重要な指摘をしていたこと（その指摘を日本が結局無視してきたことの中に国際動向からの「乖離」が胚胎していたこと）が明らかとなった。（→

５の雑誌論文③、学会発表⑥を参照）
さらに治療解放主義の動向として、ディーン博士来日に際して同博士に面会して「癩」治療法を論じ合い「治療本位」の取り組みを推進した楽生病院（院長・竹内勅）に注目し、これまでほとんど研究されてこなかった竹内勅の資料を発掘・検討し、日本社会福祉学会第５８回大会（2010 年）で発表し、それを「日本ハンセン病社会事業史研究（第３報）―治療解放主義の系譜（楽生病院）の検討―」と題する論文にまとめ、「長崎大学教育学部紀要」第 75 号（2011 年）に発表した。研究の結果、「癩は不治には非ず」という竹内の主張・信念と福岡楽生病院（看護婦・荻原水登を含む）の果たした役割の一端が解明され、治療解放主義の系譜に関する今後の研究の手がかりを得ることができた。（→５の雑誌論文①、学会発表②を参照）
なお、治療解放主義の系譜に関する継続研究として、「癩」療養所（第四区大島療養所と第五区九州療養所）における軽快退所（＝パロール）の規定とその実際についても検討し、社会事業史学会第３９回大会報告要旨集に発表要旨を執筆（2011 年３月）し、同学会において研究成果を発表（2011.5.7）した。（→５の学会発表①と当日発表資料：全８頁を参照）

（Ｂ）隔離監禁主義の動向に関する研究成果

この分野では、特に希望社の隔離主義運動に注目して研究した。希望社については、当初の研究計画では課題としていなかったが、日本ＭＴＬを研究（５の図書①参照）する中で、強制隔離が強まる 1930 年前後の隔離主義運動の中核に希望社の運動が重要な役割を果たしているのではないかという仮説が生まれ、その検証（実証）のための研究に取り組み、その成果を日本社会福祉学会第５７回大会（2009 年）で口頭発表し、それを「日本ハンセン病社会事業史研究（第２報）―民間の隔離主義運動の成立・展開過程の検討―」と題する論文にまとめ、「長崎大学教育学部紀要」第 74 号（2010 年）に発表した。（→５の雑誌論文②、学会発表⑤を参照）
さらに、「無癩県」運動の発祥地とされる愛知県において隔離主義運動（十坪住宅運動）は、方面委員の制度化と愛知県希望社聯盟の運動（＝愛知県癩病根絶期成同盟会の運動）との関連で、どう成立・展開したのか、その研究成果を社会事業史学会第３８回大会（2010 年５月）で発表した（→５の学会発表④を参照）
さらに愛知県における十坪住宅運動は、愛知県の優生運動（民族衛生学会愛知支部の活動）とどう関係していたのか、その研究成果を日本特殊教育学会第４８回大会（2010 年９月）において発表した。（→５の学会発表③を参照）

（Ｃ）治療主義と隔離主義の相克に関する研究成果
この（Ｃ）に関しては、台湾や日本ＭＴＬに注目して研究した。
当初の問題意識では、それまでの台湾ハンセン病政策の研究成果（５の図書②とその他①）をふまえて、光田健輔が 1929 年に厳しく批判した台湾における「治療至上主義」の台頭の事実を、1920 年代の台湾日日新報のハンセン病関係資料を手がかりに検証する（Ａ）に関する研究作業という位置づけであった。その検討結果は、1920 年代の台湾において治療解放主義が形成・展開されると同時に、内地延長主義に基づく強制隔離政策も導入され、両者の相克が 1920 年代の台湾において治療解放主義が優位性をもって展開されているという事実が確認できた。特に、台湾総督府が設立しようとした「癩」療養所（後の楽生院）の当初の構想が「内地の如く閉鎖的ではなく開放的」な外来治療重視型で構想されていたことが判明した点は重要な研究成果であった。（→５の雑誌論文④⑤参照）
次に、不二出版の『近現代日本ハンセン病問題資料集成』＜補巻 16~19＞として日本ＭＴＬ（日本救癩協会）の機関誌「日本ＭＴＬ（楓の蔭）」（第１～264 号）等の復刻版の解説を担当する中で、1926 年から 1953 年までの戦前・戦後にまたがる激動の約 30 年間を対象に、絶対隔離主義と治療開放（開放）主義の相克過程を検討した。結論として、日本ＭＴＬとその運動は、治療開放主義の情報とそれへの肯定的接近という側面が見られるが、結局、その「救癩運動」には、一貫して「癩」療養所への隔離収容主義が貫徹していることを確認した。（→５の図書①参照）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 平田勝政、日本ハンセン病社会事業史研究（第３報）―治療解放主義の系譜（楽生病院）の検討―、長崎大学教育学部紀要―教育科学―、査読無、No.75、2011、25－34
② 平田勝政、日本ハンセン病社会事業史研究（第２報）―民間の隔離主義運動の成立・展開過程の検討―、長崎大学教育学部紀要―教育科学―、査読無、No.74、2010、1－15
③ 平田勝政、日本ハンセン病社会事業史研究（第１報）―1922 年のディーン博士の来日とその治療解放主義の影響の検討―、長

崎大学教育学部紀要―教育科学―、査読無、No.73、2009、31－42
④　平田勝政、1920 年代の台湾におけるハンセン病問題に関する研究、研究論文集－教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集－、査読有、Vol.２、No.２、2009、1-11
⑤　平田勝政、1920 年代の台湾におけるハンセン病問題に関する研究、長崎大学教育学部紀要―教育科学―、査読無、No.72、2008、13－20

〔学会発表〕（計７件）
①　平田勝政、1920 年代のハンセン病問題と社会事業（第６報）―治療解放主義の形成と軽快退所問題の検討―、社会事業史学会第 39 回大会報告要旨集、38－39、2011 年５月７日発表（於・ノートルダム清心女子大学）
②　平田勝政、1920 年代のハンセン病問題と社会事業（第５報）―治療解放主義の系譜（楽生病院）の検討―、日本社会福祉学会第 58 回秋季大会報告要旨集 CD-ROM、116－117、2010 年 10 月 10 日発表（於・日本福祉大学美浜キャンパス）
③　平田勝政、1930 年代の地方優生運動と障害者・病者の人権（第２報）―日本民族衛生学会愛知支部の優生運動と十坪住宅運動との関連性―、日本特殊教育学会第 48 回大会発表論文集、690、2010 年９月 20 日発表（於・長崎大学文教キャンパス）

④　平田勝政、1920 年代のハンセン病問題と社会事業（第４報）―愛知県における「無癩」運動の成立・展開過程に関する研究―、社会事業史学会第 38 回大会報告要旨集、43－44、2010 年５月８日発表（於・関西学院大学）
⑤　平田勝政、1920 年代のハンセン病問題と社会事業（第３報）―民間の隔離主義運動の成立・展開過程の検討―、日本社会福祉学会第 57 回大会報告要旨集 CD-ROM、150－151、2009 年 10 月 11 日発表（於・法政大学多摩キャンパス）
⑥　平田勝政、1920 年代のハンセン病問題と社会事業（第２報）―ディーン氏の来日とその治療解放主義の影響の検討―、日本社会福祉学会第56回大会報告要旨集CD-ROM、160、2008 年 10 月 12 日発表（於・岡山県立大学）
⑦　平田勝政、1920 年代のハンセン病問題と社会事業―隔離主義と治療主義の相克―、日本社会福祉学会第 55 回大会報告要旨集、104、2007 年９月 23 日発表（於・大阪市立大学）

〔図書〕（計２件）
①　平田勝政、「日本ＭＴＬ」近現代日本ハンセン病問題資料集成＜補巻 16~19＞解説・総目次・索引、2009、全 131 頁（解説：５－17）、不二出版
②　藤野豊，訓覇浩，清水寛，平田勝政，江連恭弘，大竹章、近現代日本ハンセン病問題資料集成＜補巻 1~15＞解説・総目次、2007、全 217 頁（解説：49－67、清水寛氏と共著）、不二出版

〔その他〕（計１件）
①　平田勝政、日本の植民地下台湾におけるハンセン病問題関係資料目録、長崎大学教育学部紀要―教育科学―、№70，2006、43－48

６．研究組織
(1)研究代表者
平田　勝政（HIRATA　KATSUMASA）
長崎大学・教育学部・教授
研究者番号：１０２１８７７９

研究者番号：１０２１８７７９

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：